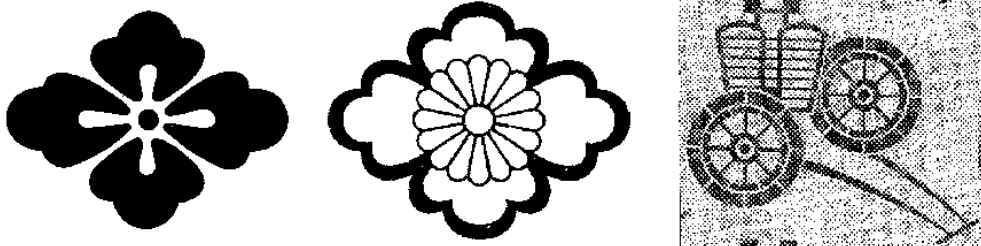


<日本の真相 2>

(1) 神宮の御紋

式年遷宮の寄付をした際、神宮で特別参拝券を頂いたが、そこには神宮の御紋が描かれていた。



向かって左が紙袋に描かれていた御紋で、花菱の中心に○と白抜きの十字がある。これは、武田信玄の家紋と同じである！

日光東照宮と静岡・久能山の東照宮を結ぶ直線上に霊峰・富士があり、更に、徳川発祥の地と言われている世良田（せらだ）東照宮がある。ここの本殿は、江戸時代には大名すら入ることができなかった禁制の場所であるが、そこには、この花菱で囲まれた徳川の三つ葉葵が描かれている！つまり、武田信玄と家康の深い繋がりが記されているため、江戸時代は禁制の場所だったのである。

家康は秦氏の中の秦氏、賀茂氏であることは<日本の真相>で述べたが、世良田東照宮のホームページの扉には、三つ葉葵と共に双葉葵も描かれている。双葉葵は賀茂神社の社紋であるから、家康が賀茂氏であることを象徴している！この東照宮には、家康の命日に因む葵祭（4月17日）があるが、時期的にも賀茂の葵祭（5月15日、関連する松尾大社の松尾祭は4月22日、23日、5月14日で、籠神社の葵祭は4月24日）を象徴していることは、言うまでもない。つまり、家康が賀茂氏である証拠が、この世良田東照宮にある！

（世良田東照宮は旧名で新田郡小島町、現在の群馬県太田市にある。群馬は羊太夫のいた所で、京都よりも古くから送り火を行っていた。太田は上賀茂にある大田神社に通じ、上賀茂神社の境外摂社で古くは恩多社と呼ばれており、天鈿女命と猿田彦命が祀られている。ここは、大田多根子と縁がある。三輪山の大物主神の曾孫が建甕槌命であり、その子が大田多根子である。賀茂建角身命の娘である玉依姫の夫は建御雷神（＝建甕槌命）だったとも言われ〔<日本の真相>の神話では火雷神だった〕、大物主神を祀ったことで知られる大田多根子は、三輪氏と賀茂氏の祖先とも言われている。つまり、大田多根子は秦氏の中の秦氏である賀茂氏と深い関わりがあるということ。その大田に因んで太田市とした、と考えるのは出来過ぎか。）

家康が埋葬されている久能山東照宮は元々、鉄舟（てっしゅう）寺の境内にあり、開祖が秦久能（ヒサヨシ）忠仁と言ひ、秦氏の大御所、秦河勝の息子である。家康が秦氏の中の秦氏、賀茂氏であるからこそ、このような重要な場所に埋葬されているのである。そして、大阪・阿倍王子（＝安倍の皇子＝安倍清明）神社の関係者に依ると、家康が賀茂氏であるという伝承が賀茂神社にあるという。家康は天下を取るに当たり、自らの出自を知る賀茂神社の関係者を殺害したという。更に、久能山東照宮は武田信玄の城跡でもある！家康は死後、即座に久能山東照宮に埋葬された。何故か、江戸城や駿府城の近くにはではなく。世良田東照宮の家紋の関係といい、久能山東照宮といい、信玄と家康の極めて密接な関係を伺わせる。

家康の素性については諸説あるが、前述の経緯から、本名は世良田二郎三郎元信であり、松平当主であった信康を殺害し、息子と称して岡崎城主になったという村岡素一郎氏の説が有力である。これは明治35年にたったの500部だけ刊行された「史疑 徳川家康事蹟」（法政大学・多摩図書館・蔵）に記載されている。そして、家康は源氏系の血を引く僧侶の息子であった、と。確かに、信玄は源氏系の血を引く僧侶である。氏の説に対しては、様々な議論がなされている。しかし、以下の点で、信玄と家康の密接な繋がりが伺える。歴史家、杉山光男氏の見解である。

- ①信玄が建てた甲斐善光寺に、家康に由来する峯薬師像がある。これは従来、秘仏であった。家康の母が、子を授かるようこの像に祈願し、家康が誕生した。家康の出生に関わる像なので秘仏とされ、公開されていなかったのである。
- ②家康の母には空白の4年間（1544～47頃）がある。丁度この頃、信玄は名の判明しない側室を迎えている。それは、信玄の家臣が記した日記「甲陽日記」に“根津から来た側室”とある。この側室こそ、家康の母である。つまり、家康は信玄の息子である！
- ③同じく甲斐善光寺に、信玄の位牌と家康の位牌が一緒に安置されている。何故、雌雄を決して戦った者同士の位牌が、信玄が建立した寺に安置されているのか。それは、親子だったからに他ならない。
- ④家康と信玄の肖像画から、目、鼻、口など、観相学的に極めて類似し、血の繋がりを伺わせる。
- ⑤家康と信玄の筆跡が類似しており、ある期間、両者が一緒に居たことが推定される。
- ⑥家康は五男に武田信吉を名乗らせ、武田家を再興した。それは取りも直さず、家康が信玄の息子だからである。

⑦つまり、日光東照宮と久能山東照宮、世良田東照宮の関係、そして、世良田東照宮本殿にある花菱で囲まれた徳川の三つ葉葵こそが、信玄と家康の関係を象徴している。つまり、両者が親子であることを、これらの象徴で表している。信玄は、天下取りを家康に任せたのである。

実に見事な解釈である。(以上、テレビ東京系「歴史ミステリー」参照。) しかも、花菱と三つ葉葵の象徴から親子関係を読み取ることは、まさしくカップラに他ならない。以上のことから、氏の説は正しく、家康は信玄の息子であると言える。それが、甲斐善光寺、各東照宮の位置関係と世良田東照宮の花菱で囲まれた三つ葉葵で象徴されているのである！

信玄は源氏系で戦術に長け、後に出家しており、陰陽道との関わりを伺わせる。風林火山などが良い例である。信玄は、比叡山から与えられた大僧正位としての地位を喜んで受け、本願寺の顕如には自分の娘を嫁がせたりして、宗教勢力との関わりも深い。宗教を裏から操作しているのは、秦氏の中の秦氏、賀茂氏である。そして、信玄は風林火山の旗と共に、花菱も掲げていた。花菱は武田家と言うより、信玄そのものの象徴である。よって、信玄も賀茂氏であった、ということになる。つまり、信玄が天下取りを家康に任せたのではなく、賀茂氏が信玄と家康に任せたのであろう。現在でも、賀茂神社には三つ葉葵の御紋が存在することが、それを象徴している。

さて、このように見てくると、神宮の花菱紋も武田信玄の家紋も、賀茂氏＝秦氏縁の紋ということになる。白抜きの十字は十字架であり、この十字架と中心の○の象徴は、＜日本の真相＞で述べたように、“日本”という国名を象徴で表したものである。つまり、この神宮の花菱紋は、“第2の日本国旗”とも言える。あるいは、日の丸の象徴を○、花菱紋の象徴を十字架と見れば、○は開いた形“阿”で陽（表）、十字架は閉じた形“吽”で陰（裏）であり、両者で“阿吽”の表裏一体を成す陰陽となるから、日の丸が“表の国旗”、花菱紋が“裏の国旗”となる。そして、この御紋により、神宮には十字架が安置されていること、日本の根幹を成す場所であることを、堂々と示しているのである。また、日の丸は“阿”で日本国の始まりを象徴し、花菱紋は“吽”で終わり、つまり日本の真相が公開されて天照大神が降臨することにより、神宮＝日本の使命が終わることを象徴している。

真ん中の御紋は特別参拝券に描かれていた御紋であるが、これは花菱紋の○と十字架を十六弁八重表菊紋で置き換えたものである。つまり、十字架と○は十六弁八重表菊紋と同じであり、十字架と○＝日本＝十六弁八重表菊紋＝天皇家であることを象徴している。十字架と○、十六弁八重表菊紋のいずれも4つの花菱に囲まれているから、花菱はメルカバーである。

向かって右の図は牛車であるが、神宮の独特な図柄で刺車と言う。“刺”は当然、天照大神が五寸釘で木に掛けられたことの象徴である。刺車には輓（くびき）と轅（ながえ）があるが、＜日本の真相＞で述べたように、“輓”は横木で忌柱、“轅”は縦木で天御柱の象徴である。車輪の軸は8本で、＜神々の真相3＞で述べたように、「生命の樹」で8本のパスが集まっているティファレトを象

徴しており、至高世界を示す日輪へと通じる“天の雲の車輪＝ケルビム”であり、八角形で象徴されるニビルであり、救世主の象徴でもある。屋形（乗る部分）は3箇所に分かれ、「生命の樹」を象徴している。その両側の部分はそれぞれ8層であり、＜神々の真相3＞で述べた「生命の樹」に於ける7区分とマルクトを象徴する。中心の部分は単純に見ると5層でタントラの五大原理、下の欠けた黒い部分と上の出ている部分を合わせれば7層で、マルクトを含めない「生命の樹」の7区分である。

さて、神宮の御紋を解釈する鍵として世良田東照宮が登場したが、世良田は大正時代に世良田村事件が起きている。これは、いわゆる部落襲撃事件である。警察は見て見ぬふりをし、被害者である部落の住民をも、事件のきっかけをつくったという理由で検挙した。当時の支配者階級はこの事件を巧みに利用して一般民衆の差別感情を助長させ、部落民との間にますます深い溝をつくらせたのである。世良田村事件は、そのような分裂の悲劇を典型的に示したものである。“部落”という言葉は元来、村の中の単位を指すが、現在は差別用語とされている。それは、部落民と呼ばれた人たちが社会的に徹底的な差別を受けてきたからである。では、部落の本当の意味とは何なのか。

(2) 部落の一般的な解釈 (Wikipedia 参照)

元々は、平安・鎌倉・室町時代辺りから区分された身分制度が発端であり、いわゆる穢多（えた）・非人（ひにん）と呼ばれる人たちのことである。公家、医師や神人等と同様に、あくまでも身分制度上の身分とされる点で、士農工商の身分制度外に位置付けられる山窩（さんか）等とは明確に異なっていた。更に、下人と言われた不自由民・奴隷とも全く異なる存在である。

非人の形成期には、検非違使管轄下で囚人の世話、死刑囚の処刑、罪人宅の破却、死者の埋葬、死牛馬の解体処理、街路の清掃、井戸掘り、造園、街の警備などを排他的かつ特権的に従事した。また、病人や障害者の世話といった仕事も引き受けていた地域・集団もあった。更に、芸能に従事する者もあり、芸能史の一翼を担ってきた。

中世前期は人々が恐れ忌避した業務に携わっていた非人であるが、中世後期に人々の感覚が次第に“畏れの忌避”から“穢れの忌避”に変遷すると共に、非人に対する捉え方も畏怖視から卑賤視へと変遷していったとされる。

中世の非人の多くは異形（蓬髪・顎鬚・童姿等）の者であった。やがて、河原者、無宿者などを指すようになった。江戸時代には身分や居住地域・従事職能等が固定化された。

非人の生活を支えた生業は勧進である。勧進とは、寺院の建立や修繕などのために、信者や有志を説いてその費用を奉納させ、それにより人々を仏道に導き入れ、作善させるのが元来の意であるが、後に寄付を集める方法として興行を催し、観覧料の収入をこれに当てるという意味としても用いられるようになった。小屋ごとに勧進場というテリトリーがあり、小屋ごとに勧進権を独占した。非人の課役は、行刑下役・警察役などである。本来、町や村は共同体を維

持するために、よそ者や乞食を排除する目的で番人を雇っていたが、非人はこの役（番非人、非人番、番太郎、番太）を務めた。

死牛馬解体処理や皮革処理は、時代や地域により穢多（長吏・かわた等）との分業が行われていたこともあるが、概ね独占もしくは排他的に従事していたと言える。ただし、それらの権利は穢多に帰属した。

穢多という呼び名には、元々“えた”と呼ばれており、穢れが多い仕事をするとして“穢多”という字を当てたという説や、蝦夷との関連を指摘する説、また、平安時代に鷹の餌として牛馬を屠殺する職務をしていた者を餌取（えとり）と言っていたので、それが訛ったという説、更には掃除人夫を意味する穢手（えて）が訛ったという説など、諸説があり、確定していない。

江戸時代には、斃牛馬の処理と獣皮の加工、革製品の製造販売などの皮革関係、刑吏、捕吏、番太、山番、水番などの下級警察官的工作、“祭礼などでの清め役”や各種芸能の支配、草履作りとその販売、灯心などの専売など、多様な職業を家業として独占していた。また関東では浅草弾左衛門の下で非人身分を支配していた。一口に穢多身分と言っても、東西での違いが大きいので注意が必要である。また、時代や地域によって言葉が指す内容（社会関係上の立場や就業形態や排他的業務など）は大きく異なるので、注意を要する。

穢多の原型は、非人の内、斃（へい）牛馬の死体の処理に携わっていた職能集団である。この集団は室町時代あたりから差別の対象になっていたが、その差別は緩やかであり、しかも戦国時代には皮革上納が軍需産業（皮革は鎧や馬具の主材料）であったことから保護された。東日本の大名の中には領国に穢多に相当する者がおらず、軍需生産のために西国から穢多を呼び寄せて領国に定住させ、皮革生産に当たらせた例も見られる。

江戸時代になり鎖国体制が確立すると、東南アジアからの皮製品の輸入が途絶え、深刻な皮不足が生じた。このため皮革原料としての斃牛馬はますます重要となり、斃牛馬処理は厳しく統制されるとともに、各農村に穢多が配置されて皮革原料の獲得に当たることになった。

居住していたのは村外れや川の側など、農業に適さない場所であったことが多い。皮なめしなどの仕事が主であったため、初めは“かわた”とも呼ばれていたが、やがて“えた”という卑称が定着化していった。皮なめしなどの仕事はかなりの臭いを発生させるため、その臭いを嫌い、離れた場所に住まわせられる傾向があった。

関東では、幕府は長吏頭・弾左衛門（穢多頭・弾左衛門）にその支配権を与え、制度を整備し、穢多身分及び非人身分を間接支配した。江戸時代初期、弾左衛門は関東の穢多身分の統轄を任としたが、1722年、非人頭の車善七との利権闘争に勝訴してから非人身分に対する支配権をも確立した。一方、当初は傀儡師・歌舞伎を支配下に置いていたが、1708年、小林新助の訴えにより、江戸町奉行は両者の支配権を剥奪した。1713年初演の歌舞伎十八番の1つ“助六”は、市川團十郎（二代目）が弾左衛門の支配から脱した喜びから制作したもので、悪役の“髭の意休”は、1709年に死去した弾左衛門集誓をモデルにしたと

言われている。(特に初期の公演では、意休が被差別部落の人間であることがはっきり解る描写があったという。)

皮革の製造加工を独占していたため、弾左衛門はかなりの富を得ており、武士や商人への金貸し業にも手を染めた。弾左衛門の地位は世襲とされ、幕府から様々な特権を与えられ、その生活は豊かであった。巷間旗本や大名と比較され、格式1万石、財力5万石などと伝えられた。また一般の庶民と同様、矢野という姓はあくまで私称であり、公文書に使用されることは無かった。「弾左衛門由緒書」等によれば、秦氏を祖先に持つとされ、平正盛の家人であった藤原弾左衛門頼兼が出奔して長吏の頭領におさまり、1180年、鎌倉長吏頭・藤原弾左衛門が源頼朝の朱印状を得て中世被差別民の頭領の地位を確立したとされる。しかし、江戸時代以前の沿革についての確証は無く、自らの正統性を主張する為のものと見られている。

江戸時代を通じて穢多身分に限定された職種は保証されていたため、経済的にはある程度安定していたと考えられる。しかし、明治時代になって身分解放令により法的な差別は解消されたものの、同時に職業の独占も失ったため、経済的困窮に陥った例が多い。

(3) 部落のカッパーラの解釈

一見、神道とは無縁と思われるこのような身分制度と差別についても、実はカッパーラで解釈できる。

A: 身分

一般的解釈にあるように、穢多・非人の職業は、一般の人が忌み嫌う“穢れた仕事”である。特に嫌われたのは“血の穢れ、死の穢れ”であり、宮中や神社では生理中の女性や産後の女性はいれなかったのである。ならば、この穢れの概念はユダヤ伝来のものである。ユダヤに於いて、穢れに関わる仕事ができしたのは、祭司支族のレビ族だけである。レビは、神殿に捧げる生贄の子羊などを捌いていた。そして、イエスの磔刑を見守り、聖十字架をイスラエルから日本まで曳いて来たのである。(御木曳きの原型。)

日本列島には元々アイヌや琉球の民がいたが、失われた十支族である物部氏の渡来により、和平を結んだ。物部氏は各地にピラミッド＝山や磐を依代（よりしろ）とする神社を建立し、ヤハウエを天之御中主神として祀り上げた。しかし、失われていない二支族、秦氏の渡来により、ヤハウエの神社はイエスの神社に変えられた。秦氏によって改竄された神社は、三井家の「伊勢両宮図」にあるように正殿三棟となった。これは、心御柱が三本一束であり、それぞれの柱に正殿が対応するためである。しかし、本物の心御柱は神宮にしか存在しないから、他の神社は心御柱の代わりに三柱鳥居が建てられた。すべての神社に、である。その後、全国の神社の縁起と記紀との整合性を持たせるために、藤原不比等が神社改革に着手した。不比等こそ、記紀を編纂させた張本人である。そして、神宮も例外ではなく、神官に藤原と同族の中臣系である荒木田氏

を配置し、教義や祭祀を強引に変更した。更に、社殿の構造も三棟から一棟に変更し、伊雑宮から強引に聖十字架を持ってきて内宮地下殿へと安置した。そして、様々なカッパーラの象徴で封印したのである。

素直に秦氏の策に従った支族もあったろう。しかし、中には伊雑宮のように、江戸時代になっても徹底的に抵抗していたものもある。大成経事件では「本当の伊勢神宮は伊雑宮である」と主張し、朝廷までもが乗り出し、最終的には一件落ち着いたものの、氏子が島流しにされている。このように、抵抗していた物部氏も多かったと推定される。しかし、抵抗していようといまいと、物部氏は秦氏によって抑えられたのである。

そして、十支族にもいたレビ族など、物部氏の中でも重要な地位にいた者は地方の重要な神社の神職などとなったが、抑圧された大部分の物部氏は各地で部落を形成した。末端の人たちは、当然、真相を知る由もない。そして、秦氏の一部もそこに合流した。秦氏は技能集団でもあり、手工業などの職人技に秀でており、前述の一般的職業とは区別された特別な職に就いた。特に、血の穢れに関わる仕事には、物部系のレビ族が就いたのであろう。レビ族以外、血の穢れに関わることはできないからである。前述の“祭礼などでの清め役”などは、それを暗示している。秦氏のレビ族は賀茂氏、忌部氏となり、神道の中樞を司るようになった。そして、戦国時代には、平家の落人＝秦氏が山間部の部落などに消えていった。つまり、このような部落は秘密を封印するために形成されたのであり、それ故、白山神社などの鍵となる神社が近くに存在するのである。(これについては、後述する。)

しかし後に、このような部落に罪人、病人、障害者などが入れられるようになると、職業の差別などから民衆の間に次第に差別的意識が生じ、部落は穢れた人たちの集まりであるから近寄ってはならない、というように変遷していった。前述のように、芸能に関わる人たちもこのような人たちであるが、例えば歌舞伎を見れば、発祥は京都の河原町であり、河原はそのような人たちが住んでいた場所である。

特に明治以降、朝鮮半島から強制的に移住させられた人たちなども合わされ、部落は罪人の末裔や半島の人間たちの集まり、などに見なされるようになり、差別的意識は一層強くなってしまった。

では、ここまでの何がカッパーラなのか。カッパーラの奥義は、解るところに堂々と隠す、ということである。部落を形成させられた民は、知らず知らずのうちによそ者を排除するようになり、よそ者も彼らを差別して近寄らないようになった。これは、長いユダヤの歴史から培われたものであろう。それが結果的に、部落の近くに存在する神社や重要な場所を保持するのに役立ってきたのである。つまり、知らず知らずのうちに、そのような役割を負わされており、民自身がカッパーラの一部と化しているのである。酷と言えば酷だが、手段を選ばないのが八咫鳥である。それほど、日本に封印された秘密は重要なのである。

このような仕掛けを施したのは秦氏であるから、前述の「弾左衛門由緒書」等による弾左衛門の血筋は秦氏である、という記述は極めて信憑性の高いものである。

B：土地の構造

前述のように、いわゆる部落と呼ばれているところは、後世になってできた場所を除き、多くは重要な神社などを囲うような（遠ざけるような）場所に存在する。これは、秦氏の重要拠点で物部系の部落が取り囲む構造であると解釈できる。

源平の合戦では、源氏は白旗、平家は赤旗である。源氏は騎馬戦が得意だから、騎馬民族で失われた十支族＝物部氏、平家は集団での海戦が得意で、ペルシャ人のような風貌だったとも言われているから、失われていない二支族で秦氏である。“平”という文字に十字架が隠されていることから、平氏は秦氏である。そうすると、日の丸は白地に赤丸だから、秦氏を物部氏が取り囲む形、すなわち、十支族が二族を取り囲む構造である。つまり、この構造が地上でも反映されているのである。

（ならば、武田信玄は秦氏であり、源氏＝物部氏でもあるということになり、矛盾しているように思える。しかし、秦氏以前に渡来していた物部氏ではなく、応神天皇のように秦氏と共に渡来し、原始キリスト教に改宗した失われた十支族であると考えれば、矛盾しない。あるいは、賀茂氏は秦氏の中の秦氏なので、やはり十支族系ではなく、信玄の系図が偽、ということも考えられる。）

例えば、前述の世良田には徳川、武田、そして賀茂氏の秘密が封印されている世良田東照宮がある。それを守るために、部落が形成されたのである。

京都では、裏神道の総本山、下鴨神社の河原にはそのような部落があった。下鴨神社は、明治までは皇族と一部の特権階級のみしか入れない禁断の場所だった。周りに部落を配置することにより、一般の人は容易に近づくことはできなかったのである。京都は観光客などはまったく拒まず、むしろ歓迎する方だが、一旦住人になろうとすると、昔からのしきたりや独自のやり方などを盾にして、極めて排他的である。

三重県も、部落が多い県と言われている。特に、伊賀、松阪、伊勢周辺である。伊賀と松阪は食肉＝屠殺を扱い、伊勢を囲うような形である。伊勢も京都と同様に、観光客は歓迎するが、実際に住むとなると大変なようである。

伊賀と言え、忍者と芭蕉である。芭蕉は実は忍者であった、という説がある。「奥の細道」では、1日に12里＝48キロも歩いている。江戸から東北・北陸地方を太平洋岸から日本海沿岸にかけて歩き、約150日間で600里（2400キロ）ほどの道のりを踏破することは、当時46歳の一般人にはほとんど不可能である。（http://www.2nja.com/2nja_zatsugaku/matsuo_basyou.html 参照。）

また、旅の工程が外様大名領地であり、外様大名は中心部を守るために配置された秦氏一族である。外様大名も、歴史の表向き解釈では、徳川家に反逆しそうな者たちであるため、周辺部に配置されたということになっているが、見

方を変えれば、これも部落の発想と同じである。そして、忍者は昔“細人（しぬび）”と言われていたことから、「奥の細道」という題名は細人＝忍者を象徴するカッパーラと言える。何よりも、芭蕉の名字が“松尾”という秦氏の総本山の名であることが、芭蕉の出自を端的に表している。伊賀も甲賀も、忍者は秦氏である。代表的な名前が服部半蔵の服部（神服）であり、これは機織りに由来し、秦＝機＝礫の道具＝十字架であった。因みに、忍者を初めて組織したのは聖徳太子で、志能備（しのび）とある。（聖徳太子は架空の可能性が高いから、聖徳太子に代表される秦河勝らによって組織されたのである。）

松阪は、秦氏の番頭、三井家の出身地である。三井家は現在の大宮司鷹司家と血縁にあり、トヨタ、鴻池などとも血縁にある。三菱の岩崎家とも、縁続きである。松阪で酒造業を営んでいた三井高俊の四男・高利（八郎兵衛）が江戸に進出し、呉服店“越後屋”を創業したのが、三越の始まりである。当時の越後屋から見て鬼門に当たるのが、三囲（みめぐり）神社である。ここは商売繁盛に関わるお稲荷さんが祀られており、三井の井の字が囲まれていることから、三井家を守護してくれる神社として崇敬されている。しかし、“囲”という字は3×3のゲマトリアとなり「生命の樹」の三神三界を象徴しており、更に“三”で「生命の樹」の三柱をも象徴している。

高利は京都でも呉服物仕入れ店を開業し、三柱鳥居のある蚕の社として知られる木嶋坐天照御魂神社の摂社である養蚕神社を崇敬している。この鳥居を気に入ったためかどうかは不明であるが、三井家は三囲神社の境内に三柱鳥居を建立した。そもそも、三囲神社に稲荷を勧請したのは蚕の社の宮司、神服（はっとり）氏である。蚕の社は元紬の森であり、現在の紬の森である下鴨神社はここから勧請されている。そして、下鴨神社の摂社には三井神社があり、秦氏の中の秦氏、賀茂氏の祖が祀られている。

実は、三井家は藤原道長の末裔である。道長の5世の孫、信忠の子、右馬助信生が大和の三井村を所領としたことにより、三井を名乗った。三井家は15代・乗定の時、佐々木家から養子を迎えた。この佐々木家は、近江に拠点を持つ佐々木源氏で、彼らは天台宗の園城寺（おんじょうじ）を崇敬していた。この寺は、霊水が湧く井戸に因んで、御井寺（みいでら）とも称し“「三井寺（みいでら）」の名で知られている。そして、この寺では新羅（しんら）明神が祀られている。新羅は半島での秦氏の拠点であった。

赤福は宇治橋の袂＝河原にある。姓は浜田で“浜”はその手の名字に多いという。この一族が三重県の財政に深く関与していたということは、三井家との関わりは否定できない。現社長は社長に就任する前に、日本橋・三越の呉服売り場に就職していた。三越は三井直系のデパートであり、呉服はデパート発祥の元である。

日本橋には三井系の会社が並び立ち、三越に対抗するかのよう高島屋もある。高島屋は、京都にて初代・飯田新七が古着、木綿商を開いたのが始まりである。その元は、飯田の養父である儀兵衛が出身地・近江国高島郡南新保村（現在の滋賀県高島市）から京都に出てきて“高島屋飯田儀兵衛”と称して米穀店

を営んだことである。海外の博覧会に豪華な刺繍を施した着物を出品し、数々の賞を受賞したことで、その後、宮内省御用達となった。(高島屋の現本店は難波である。) 京都ということだが、三井高利が開業した呉服物仕入れ店との関係は不明である。しかし、儀兵衛の出身地である近江国高島郡南新保村は琵琶湖西岸に位置し、神宮と同じ御紋の住吉神社があることは、象徴的である。

デパートの高島屋は三和銀行の融資であったが、貿易部門は丸紅傘下であった。三和銀行は三十四銀行、山口銀行、鴻池銀行の合併により創立され、鴻池は前述のように、三井と血縁関係にある。丸紅は同根の伊藤忠商事と共に、住友銀行の融資系列下にあった。住友銀行は、現在の三井住友銀行として三井傘下にある。つまり、対抗しているように見えて、実は三越と高島屋は財政的に三井傘下にある。表向きの三井が三越、裏が高島屋である。高島屋のマーク“高”がピラミッドの「重力拡散の部屋」を表していることは<神々の真相 2>で述べた。

伊勢の南の方は志摩である。志摩には伊雑宮がある。伊雑宮では昔、氏子が島流しにされたが、島流しは罪人であるから、部落的な場所と見なせる。また、志摩は<神々の真相 2>で述べた鹿島の“シマ”と同じで、テリトリーの意味である。

C：白山

Aで登場した白山についてである。白山は、泰澄（タイチョウ）が開いたと言われている。泰澄は越前の出身で、高句麗からの亡命帰化人の子であった。後世に作られた泰澄の伝記「泰澄和尚伝」によれば、14歳の時、越智山に登り、十一面観音を念じて修行を積んだという。そして、加賀の白山や京都の愛宕山などを開いた修験道の開祖で、本名は秦泰澄で秦氏である。ところが、正式な記録文書には、泰澄の名は見られない。泰澄は秦氏であるから、ご他聞に漏れず、歴史の表舞台から消え去っているのである。あるいは、架空である可能性もある。十一面観音は<神々の真相 3>で述べたように、11は隠されたダクトも含めたセフィロトの数であり、原型はコスミック・ヴィシュヌである。11個の顔のうち1個は真後ろにあって笑顔であるが、これは隠されたダクトを表している。コスミック・ヴィシュヌは様々な形態をとり、無数の手が描かれたものは千手観音のルーツであり、1000は完全数10（＝神）の3乗で、「生命の樹」の三柱の神と三神一体を表す。コスミック・ヴィシュヌには、インダス・カッパラの奥義が満載されている。そして、泰澄は高句麗からの亡命者である。つまり、高句麗経由で渡来した、カッパラの奥義を知り尽くした秦氏の象徴である。

さて、白山には白山神社がある。ここには、菊理姫命（ククリヒメノミコト）、イザナギ、イザナミが祀られている。菊理姫は今回初めて登場する神であるが、加賀の白山や全国の白山神社に祀られる白山比咩神（シラヤマヒメノカミ）と同一神である。

日本神話に於いて、菊理姫は日本書紀の一書に一度登場するだけである。イザナミに逢うために黄泉を訪問したイザナギは、イザナミの変わり果てた姿を

見て逃げ出した。しかし泉津平坂（黄泉比良坂）で追いつかれ、そこでイザナミと口論になった。そこに泉守道者（ヨモツチモリビト）が現れ、イザナミの言葉を取継いで「一緒に帰ることはできない」と言い、菊理姫が何かを言うと、イザナギはそれを褒めて帰った、とある。菊理姫が何を言ったのかは記載されておらず、また出自なども書かれていない。この神話から、菊理姫はイザナギとイザナミを仲直りさせた縁結びの神とされている。また、死者（イザナミ）と生者（イザナギ）の間を取り持ったことから、穢れを払う神格ともされる。

ならば、菊理姫は穢れに関する象徴と見なせる。何よりも、読みが“ククリ”で高句麗に通じ、秦氏の関与であることを象徴している。つまり、“穢れた地、集落、集団”とされる部落の多くに、白山神社があるのはこのためである。イザナギとイザナミは国生みの象徴であり、元からいた物部氏の象徴でもある（*）から、新生日本国建設のため、秦氏が策を講じた象徴である。また、ククリとは、古代朝鮮語で剣のことである。祀られる剣の大元は草薙神剣で、ここから物部氏（の集落）＝部落に関係が深いことが解る。

因みに、織田信長の実家は織田剣神社であり、信長は忌部氏である。そして、阿波忌部氏が聖地と崇め、契約の箱があると噂の高い四国の剣山にも劔神社がある。劔神社は白山系であり、白山神社の近くに劔神社があることが多い。織田劔神社はこの系列である。長篠の合戦を描いた図では、信長の側に、背中に六芒星を背負った人物が描かれている。これが陰陽師、漢波羅である。信長が漢波羅を動かしていたように見えるが、実は逆で、漢波羅が信長を動かしていたのである。そのため、信長が忍者の拠点の1つ、伊賀を討ったことが原因で漢波羅たちの怒りを買って、抹殺されたとも言われている。この六芒星は、家康に仕える人物、漢波羅にも描かれている。

劔は武器であり、武芸神の象徴である。武芸神としては鹿島大明神、香取大明神であり、更に一緒に祀られる神は八幡大明神である。だから、白山神社の代わりに、八幡神社の場合もある。

白山とは、白く輝く山である。物部氏にとっての山は神の山ピラミッドであり、ピラミッドはかつて大理石の化粧板で覆われ、光り輝いていた。

しかし、菊理姫命の漢字に着目すると“菊の理（ことわり）”となる。“菊”は<神々の真相2>の十六弁八重表菊紋で述べたように、草冠で「生命の樹」に於ける絶対三神と「合わせ鏡」の奥義、そして下のつくりで、ヤハウエ＝イエスを象徴しており、“再生、復活”を象徴する。つまり、“菊の理”とは“イエスの理”のことであり、“復活”を象徴している。

また、イザナギは黄泉の国に行き、帰る途中でイザナミと口論となり、菊理姫の助言により事無きを得たから、菊理姫は“黄泉帰り＝蘇り＝復活”を象徴している。そうすると、菊理姫が祀られている白山神社の“白山＝白く光り輝く山”の意味が見えてくる。イエスはペトロ、ヤコブ、ヨハネを高い山に連れて行くと、イエスは光り輝き、モーゼとエリヤが現れてイエスと語り合った。そして、御父の「私の愛する子、私の心に適う者」という声を聞き、イエスから「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことを誰にも話してはならな

い」と言われた。つまり、イエスが“復活”を約束し、光り輝いて変容した山の象徴が白山である。

なお、菊理姫は女神であるが、「合わせ鏡」で女神とされたことは言うまでも無い。

*イザナギとイザナミの解釈

イザナギとイザナミは国生みの象徴であり、元からいた物部氏の象徴とした。しかし、イザナギとイザナミは次のようにも解釈できる。

物部氏の姫に秦氏の大王（応神天皇）が婿入りしたから、イザナギは秦氏、イザナミは物部氏の象徴である。国生み神話では、二神が天御柱を回ってまずイザナミが声を掛けたが、生まれた子は骨の無いグニャグニャの水蛭子と淡島だった。その後、今度は先にイザナギが声を掛け、国生みは成功した。この神話が意味するところは、イザナミは物部氏の象徴であるから、物部氏＝ユダヤ教が主導では国生みがうまくいかず、秦氏＝原始キリスト教が主導することによって日本国の国造りが成された、ということである。

また、イザナミは幾多の神々を生み、火之迦具土神を生んだ時、大火傷を負って死んでしまった。イザナギは黄泉の国までイザナミを迎えに行ったが、イザナギは約束を破ってイザナミの姿を見てしまい、驚いて、イザナミを黄泉の国に置き去りにして逃げ帰ってしまった。その後、アマテラスやスサノオを単独で生み、国造りを行った。イザナミが死んで黄泉の国に置き去りにされたということは、物部氏が秦氏によって封印されたということである。そして、皇祖である天照大神がイザナギから生まれたということは、イエスの奥義を司る秦氏が封印を施し、国造りを行ったということである。

このように、部落も秦氏が講じたカッパーラである。しかし、現在では、これまでの部落差別に報いるために、市の職員に優先的に就職させるなど、逆差別を生んでいる。そして、何も知らない当事者たちは横柄な態度を取ったり、差別する側もインターネットなどで陰湿化の一途を辿っているのは、嘆かわしいことである。日本国内でこれほど問題化している以上、真実を公開して日本が1つになる日は近いと思われる。

平氏がペルシャ系であったこと、イスラエル・アミシャブのラビが日本を調査していること、世良田東照宮で花菱と三つ葉葵が並んでいることなどがテレビで放映され、最近では、スフィンクスが狛犬の原型であることまで放映されていた。また、ひげ殿下がニューヨーク・タイムズで、皇室の内情を暴露している。やはり“その時”は近い。

(4)信貴山

テレビで信貴山を拝見した。住職が着ていた袈裟には十六弁八重表菊紋が描かれているが、その中心には卍（上の棒は短い）が描かれていた。これは、T字型十字架の上に、罪状板がある形状である。

伝承によると、寅の年、寅の日、寅の刻に四天王の1人である毘沙門天が聖徳太子の前に現れ、その加護によって物部氏に勝利したことから、聖徳太子が

594 年に毘沙門天を祀る寺院を創建し、“「信ずべき貴ぶべき山（信貴山）」と名付けた。以来、信貴山では聖徳太子にあやかり、寅の日は毘沙門天の御利益が頂ける＝福を授かる“福寅”と呼ばれてきた。また、寺の至る所に虎の張り子が置かれているのは、その逸話に由来している。

ここは真言宗である。しかし、真言宗はチベット密教を基に空海が創った。空海は 774 年生まれだから、信貴山の元は真言宗ではない。あるいは、実のところ、創建年は不明とされおり、聖徳太子も架空の人物である可能性が高いから、空海＝秦氏の大僧侶が設立し、そこに聖徳太子の逸話を重ねたと考えるのが妥当だろう。

祀られているのは、前述の通り毘沙門天である。毘沙門天の元は、ヒンズー教の富の神クベーラである。クベーラは帝釈天＝軍神インドラの配下として、仏の住む世界を支える須弥山の北方に住み、北を守護する。須弥山とはシュメールのことであり、その北方はエンリルの息子で軍神のイシュクル（アダド）の領地だった。イシュクルはインドラの原型である。だから、軍神イシュクル及びその配下が北方を守護する神（仏）となるのである。

そのため、京都市街の北に当たる鞍馬でも毘沙門天が祀られている。では、信貴山を北と見た場合、南に位置する重要な史跡は聖徳太子の墓陵である。そして、信貴山の真東には聖徳太子縁の法隆寺があり、真西には同じく聖徳太子縁の住吉大社がある。つまり、聖徳太子縁の場所で T 字型十字架を形成する。頭部には、生駒山が相当する。更に北上すると、10 年ばかり都が置かれた長岡京へと至る。

また、前述の寅の年、寅の日、寅の刻で“トラ、トラ、トラ”となる。イエスに象徴が重ねられるイナンナは、獅子を従えていた。しかし、東南アジアには獅子はおらず、同じ猫科の虎がいるので、虎がイナンナの象徴となる。よって、“トラ、トラ、トラ”でイナンナ、つまりイエスを象徴している。そして、3 つの寅で「生命の樹」の 3 本柱を象徴する。寅はウ冠、下のあし部、中心部分に分けられるから、これで三神三界となる。また、中心部分は“T プラス日”であり、“日（＝太陽）の神であるイエスが十字架に掛けられた”ことを象徴する。

なお、“寅”が元々意味するものは“矢”であり、元字はシュメールにある。寅が勝利を導く軍神の象徴ならば、シュメールの軍神はイシュクルとニヌルタである。特にニヌルタは軍神の大元であり、彼の星座は射手座である。“矢”はこれに因み、神社の御神事で槍や剣ではなく弓矢が使われるのも、これに由来する。弓には、厄を退散させる、邪を払うという意味も込められている。

(5) 夏越し（なごし）の祓え

イナンナに関連して夏越しの祓えについて。6 月 30 日に熱田神宮の夏越しの祓えに参加した。これは、半年間の厄を祓う神事であり、心付けを出せば誰でも参加できる。その祓えの様子を紹介する。

紙垂（かみしで）に似た人形（ひとがた）の白紙に名前と年齢を記入し、心付けを払って、3 つの葉に分かれた葦を頂く。本殿の向かって左側に、七五三の

ゲマトリアを形成する点に忌竹（いみだけ）を配し、神事を行う場所を囲っている。祓えを受ける人は下層世界に相当する区画に東向きに座る。神職は白装束の9人×2で、至高世界に座って祓えを受ける人たちの方を向く。神事は中高世界で行われる。

大祓えの祝詞が唱えられ、東向きと南向きに榊で祓えを行う。その後、祓えを受ける人は頂いた葦を持ち、前肩の左→右→左に当てて厄を移す。それを神職が回収して唐櫃に入れる。

更に、白い布を2セット、神職がそれぞれ4つに裂いて唐櫃に入れる。そして、名前と年齢を記入した人形の白紙も唐櫃に入れる。これで神事は終了である。穢れを移したこれらのものは、おそらくすべて焼いて清められる。

人形は人間の身代わりである。3つの葉に分かれた葦は「生命の樹」である。葦はエジプトやメソポタミアに生育するし、日本神話に於ける日本は葦原中国（あしはらのなかつくに）である。

忌竹はイエスが掛けられた聖十字架であり、伊雑宮の御田植祭で立てられる忌竹と同じ意味である。“忌”という字は神社に於いて“この上なく清浄”という意味であるが、イエスの死に関わるから“忌む”であり、イエスは蛇神だから“イエス＝蛇＝巳＝己の心”ということである。“竹”の旧字は草冠の元字“艸”を上下ひっくり返した字である。“艸”は三叉の「合わせ鏡」で、3本柱の「生命の樹」だから、古事記と日本書紀、旧約と新約に於ける絶対三神の「合わせ鏡」である。竹は、その“艸”の「合わせ鏡」となる。

ゲマトリアの3×3は「生命の樹」の三柱三界である。白装束は死に装束。9人×2は三柱三界×2で、「生命の樹」に於ける絶対三神の「合わせ鏡」を示す。

東は日の出、南は正殿の向きで太陽＝イエスを拝する。

唐櫃は契約の箱アークを模したもの。旧約では、罪や穢れを祓うために、衣を裂き、粗布を纏い、時には灰を頭から被り主に祈った。新約では、イエスが十字架に掛けられる前に服を剥ぎ取られ、ローマ兵がくじ引きをして裂いて分けた。

このような祓えの神事さえ、聖書とカッパレーラを知らずして、真の意味を理解することはできない。

他に、夏越しの祓えの別形態として、茅の輪（ちのわ）くぐりがある。茅の輪とは茅草で作られた大きな輪のことであり、茅（ち＝かや）とは、茅萱（ちがや）、葦（あし）、菅（すげ）、薄（すすき）などの総称である。茅はイチイ科カヤ属の常緑針葉樹で、成長は極めて遅いが寿命は長い。側枝は三叉状に伸びる。

茅の輪の起源については、善行をした蘇民将来（ソミンショウライ）がスサノオから「もしも疫病が流行したら、茅の輪を腰につけると免れる」と言われ、その通りにしたところ、疫病から免れることができた、という故事に基づくと言われている。蘇民将来＝スサノオ＝イナナナである。

あるいは、輪自体は女性器の出口を模したものであり、そこから出ることによって穢れの無い新たな生命として生まれ変わる、という説もある。（ひな祭り

の菱餅の形もこの説が有力。)

しかし、この輪は絶対神の目であり、相撲の土俵やまわしも同じである。絶対神の目は至高世界から覗いており、そこをくぐるということは、「生命の樹」の至高世界に達することである。輪が茅で作られるのも、常緑樹で寿命が長く、三叉状に伸びる側枝が逆鉾で「生命の樹」を象徴するからである。

7月31日(午後6:00開始)、熱田神宮の末社である鈴之御前社(れいのみまえしゃ、名古屋市熱田区伝馬二丁目)の例祭に出かけた。ここは天鈿女命が祀られており、俗に“鈴の宮(れいのみや)”とも言われ、その昔、精進川がこの宮の傍らを流れ、東海道を往来する旅人は、熱田神宮に参拝する前にここで身を清め、鈴の御祓いを受けてから本宮へ参拝することになっていた。

鈴の御祓いを受けてから参拝するのは、ユダヤの風習と同じである。鈴に関する姓として“鈴木”があるが、これは神武天皇が大和に入る時、稲穂を献じて賜った“穂積の束”は紀州の言葉でススキと言ひ、あるいは熊野権現の神木ナギ(竹柏)の枝に鈴を付けて神武軍の先導をしたことに由来するともいう。(Wikipedia参照。)この先導の原型は天孫降臨を導いた猿田彦であり、その妻・天鈿女命は神楽の祖で鈴に関係する。そして、この二柱は道祖神として祀られ、“導きの神”として崇められている。天鈿女命が祀られているこの社が鈴之御前社と呼ばれるのは、このような理由に依ると思われる。

熱田では、夏越しの祓えは新暦、茅の輪くぐりは旧暦で行われている。

行ってみると、地元にある小さな氏神様と同じぐらいの規模である。そこに、熱田神宮の神職が5人、巫女が5人、他に楽師が3人ほど居て太鼓や笛を鳴らしていた。この規模の社でこの扱いは破格であり、如何に重要な社か、ということが解る。先に、神職と地元の崇敬会の人たちが神事を行う。社殿は熱田神宮を向く北向きで、社殿に向かって西側に神職、東側に祓えを受ける人たちが並び、ちょうど鳥居の中心(主が通られる道)が空いて神事を行う場所となる。例の葦を手を持ち、前肩の左→右→左に当てて厄を移し、神職は祝詞をあげ、茅の輪を神職と共に左回り→右回り→左回りと8の字を書くように3回くぐり、葦を唐櫃の中に入れる。その後、神職による御祓いを受け、社殿に参拝して終了。ここまでは、一般の人は立ち入り禁止であり、終了後、解禁される。一般の人は茅の輪をくぐり、参拝して終わりである。一説によると、輪をくぐる人、あるいはくぐる前にあげられる祝詞では、「水無月の夏越しの祓えする人は、千歳の命延ぶと言うなり」という古歌を唱えるようである。

葦を持って左回り→右回り→左回りと8の字を書くように3回くぐり抜けるのは、神職が扱う祓い串と同じである。茅の輪をくぐるということは、自分の身体を祓い串に見立てることである。ただし、神職は祓う側、参加する人は祓われる側だから、祓い串とは逆向き、「合わせ鏡」となる。

葦は夏越しの祓えと同じものであり、3つの葉に分かれた葦は「生命の樹」である。左回り→右回り→左回りも、前肩の左→右→左に当てて厄を移すことと同じである。“8”は永遠と救世主の象徴であり、イナンナの象徴でもある。茅の輪くぐり元の由来が蘇民将来＝スサノオ＝イナンナだから、イナンナを象徴

する“8”となる。そして、ここはイナンナが原型の天鈿女命が祀られている。

地元の人が大半であるが、誰でも参加でき、心付けも必要ない。熱田神宮の境内で行う夏越しの祓えが本格的な儀式ならば、この茅の輪くぐりは簡潔な儀式と言えるだろう。

(6) 茶の意味

熱田神宮に関連して。6月5日、熱田神宮の例祭に参加した。御神事は新嘗祭に基づく。何故か、祈祷殿の神前では茶道によって2献、お茶が奉られていた。では、何故、神社に於いて茶道で、茶道とは何か。

① 茶碗

茶碗は3回半回す。3回転半と言えば、「生命の樹」に絡みついた蛇の巻き数である。そして、イエスに関連する「生命の樹」と言えば聖十字架である。つまり、茶碗は「生命の樹」と聖十字架を象徴している。

② 抹茶と御菓子

茶碗が「生命の樹」と十字架ならば、抹茶はイエスの血であるワイン、菓子はイエスの肉であるパンの象徴である。

茶道は禅寺系から発生しているから酒は禁物で、それでお茶ということである。茶はラテン語系で“テ”と言う。これは“主、神”という言葉のヴァリエーションである。そして、日本語では“手”であり、手は神と人を結ぶもの。(おむすびは手で握るが、この“むすび”は古事記の高御産巢日神と神産巢日神の“産巢”に由来している。)

初期の茶道菓子は“ふの焼き”と言い、小麦粉を練って焼き、味噌を塗ったものだった。つまり、酵母の入らないパンそのものである。

③ 蹲い (つくばい)

蹲いとは、茶室の庭にある、手を洗って清める場所、つまり、神社の手水舎に相当する。石庭で有名な竜安寺には有名な蹲いがある。“吾唯足知”である。

“口”を中心に四文字が配置され、メルカバの形である。庭の石はすべては見えないが、足ることを知らなければならない。人生も同じである。

④ 茶室に入るにじり口

にじり口は狭い。一般的には、武士も刀を外さないと入れず、茶室内は身分の上下を無くすため、と言われている。しかし、真相は新約にある。マタイの福音書7:13、14にこうある。

“狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。”

茶室のにじり口は命に通じる門、神の国に通じる門なのである。

⑤ “茶” という字

最も重要な草冠がある。草冠の元字は“艸”で、三叉の「合わせ鏡」である。三叉は 3 本柱の「生命の樹」だから、古事記と日本書紀、旧約と新約に於ける絶対三神の「合わせ鏡」である。

“ホ”は一對のケルビムの間に安置された十字架で、契約の箱の上に安置された聖十字架を象徴する。その間の“人”は、土俵の上にある屋根、ピラミッドの「重力拡散の間」の天井の形で、「生命の樹」の至高世界である。

⑥ 祈祷殿に奉られた 2 献のお茶

2 本の「生命の樹」だから、古事記と日本書紀、旧約と新約に於ける絶対三神の「合わせ鏡」である。そして「知恵の樹」と「生命の樹」の「合わせ鏡」である。

他にも、茶道にはキリスト教の儀式に近いものが多く、キリスト教徒の人が茶道のお手前を拝見すると、キリスト教との共通点を見出すらしい。そして、茶道の創始者、千利休は洗礼名サン・ルカに因む。

神社は天照大神＝イエスを祀る神殿だから、イエスに関係の深い茶道が奉じられる。

(7) 草薙神劍仮御遷座

熱田神宮に関連してもう 1 つ。10 月 22 日は、本宮改修工事のための草薙神劍仮御遷座の御神事があった。夜 8 時からの開始だったので、一般の人は見ることができないと思っていたが、翌日の報道では、かなりの人が参列したようである。行かなかったことが、悔やまれる。

報道によると、94 人の神職が関わったらしい。熱田のどこに、それだけの神職がいるのか。仮とは言え、重要な三種の神器の御遷座だから、八咫鳥が下鴨から来たことは間違いない。御神事の時間も夜 8 時で申の刻。申の原型象形文字は稲妻である。つまり、ヤハウエだから“ヤ”で 8 時。94 人は $94=9+4=13$ で、イエスと 12 人の使徒である。

方角で言うと、申の反対方向＝対を成すのが寅である。申が稲妻で姿の見えないヤハウエならば、寅は姿の見えるイエスである。寅と言え、イエスの姿が投影されている聖徳太子縁の信貴山である。

御神事では、移動に際してすべて周りを大きな白い絹で囲み、御神体が収められた唐櫃を持ってそろそろと移動する。第二次大戦中、空爆されても大丈夫なように造られた、コンクリート製の倉の中に仮移動させる。御神体の入っている唐櫃は嚴重に布でくるまれており、宮司すら、天皇陛下でも見ることはできない。見ることができるのは、八咫鳥だけである。だから、宮司ですら、本物かどうか確認することはできない。

しかし、これも偽物（レプリカ）である。いくら幕に囲われていようと、本物を、一般人が参列している中で運ぶわけがない。万が一、ということがあるからである。神宮の式年遷宮でも、文化人が選ばれて参列するが、移動させる

のは八咫鏡、つまり十戒のレプリカである。これも、白い絹で囲われた中を運ばれる。地下の御神体は、真夜中に八咫鳥が動かす。それからすると、剣も真夜中に、誰の目にも触れることなく、八咫鳥が移動させているはずである。あるいは、最初から別宮にあるのかも知れない。

この御遷座の翌日、別宮の八剣宮に報告する御神事があった。この別宮は、元明天皇の勅命により造られた神剣を祀るために、創建されたとのこと。熱田の創建は 113 年で、この別宮は 708 年。年代からして、神宮の創建に関係していることは間違いない。つまり、一旦は秦氏に渡されたアロンの杖は“その時”が来るまで、物部氏の最高権力者に戻された。ならば、勅命により造られた神剣とは、草薙神剣に他ならない。“杖”が“剣”として造り替えられたということである。

草薙神剣は、8 つの頭がある八岐大蛇から出てきた。剣、すなわちアロンの杖は、ヤハウエが族長の印として選んだから、ヤハウエ=8 に関係する。そして、この別宮の名称は八剣宮（はっけんぐう）である。だから、本物はずっとここに安置されているはずである。そのため、わざわざこの別宮に報告するのである。そうすると、やはり御遷座させたのは、本物の草薙神剣のレプリカとなる。

この別宮は本宮と同じ南向きであるから、本宮との繋がりが伺える。ところが、別宮と同じ敷地内にある上知我麻神社と大国主社（大黒様）、事代主社（恵比寿様）は東向きである。ここは大黒・恵比寿が祀られているため、初恵比寿で賑わう。上知我麻神社には宮簀媛命（ミヤスヒメノミコト、ヤマトタケルの妻）の父で尾張国造である乎止與命（オトヨノミコト）が祀られている。ならば、尾張国造＝尾張氏の祖先が祀られ、多くの物部系の神社がピラミッドに倣って東向きになっていることから、元々の熱田大社は上知我麻神社であると言える。そこに、草薙神剣として造り替えられたアロンの杖が戻されたことにより、新しく本宮と別宮を造営したのであろう。その本宮と別宮は三種の神器の 1 つを祀るわけだから、神宮に倣い、南向きとしたのであろう。熱田には他の神社に見られるような狛犬と注連縄は表には無く、これも神宮に準じている。

(8) はだか祭り

天下の奇祭、国府宮のはだか祭り。国府宮の尾張大國霊（おわりおおくにたまのかみ）神社で、毎年 2 月中旬頃行われる勇壮な祭りである。大まかに説明すると、祭りは次のように行われる。

- ①神男は神社でくじ引きにより選ばれる。
- ②選ばれた神男は全身の毛を剃り落とす。
- ③御神事の 3 日前になると、神社に籠もって身を清める。
- ④前々日に土餅搗神事並秘符認（つちもちつきしんじならびにひふしたため）が行われる。
- ⑤前日に庁舎（ちょうや）神事が行われ、大鏡餅が奉納される。
- ⑥当日（旧暦正月 13 日）、御神事の前に儺負笹（なおいざさ）が奉納される。
- ⑦祭りに参加する裸男は、白い下帯 1 枚の姿になる。裸男から儺負布（なおい

- ぎれ)をもらうと御利益がある。
- ⑧以前に神男を務めた者たちが全裸の神男を取り巻いて守り、参道に出る。
- ⑨神男はすべての厄を受けるので、神男に触れた者は厄が落ちる。そのため、裸男たちは争って神男に触ろうとする。
- ⑩神男は最後に儼負殿(なおいでん)に引き入れられ、表向きの祭りは終わる。
- ⑪翌日の午前 3 時に庁舎に於いて夜儼追(よなおい)神事が行われ、祭りは終了する。

実に奇怪で勇壮な祭りであるが、実はイエスが磔にされる場面を再現している！以下、その意味を見ていく。

①くじ引き

聖書に於いて、何かを決める場合、特に御神意を伴う場合はくじ引きで決められた。一般的には神男と言うが、正式には儼負人(なおいびと)と言う。儼負とは厄を背負うことであり、本来の儼=厄とは、イエスが背負った全人類の贖罪のことである。

②剃髪

古来、毛髪には不思議な力が宿るという観念があった。旧約に登場するナジル人、サムソンは怪力の持ち主だったが、長い髪を剃られて怪力を失い、ペリシテ人に捕らえられた。ナジル人とは、自らを聖なる者として神に捧げ、献身する者のことである。そのため、厳格な規定があり、髪を剃ってはならないというのもその1つである。

対してエジプトでは、僧侶が剃髪するのは神に対する恭順の姿勢を表わした。

また、すべての大元である“主エンキの御言葉”では、アダパがニビルの大神アヌの下へ連れて行かれた時、ボサボサだった頭を剃られた。

よって、剃髪だけならば、髪を剃ることによって“イエスの奇跡の力”を無くして厄を背負わせることと同時に、神の前に従順であることを象徴していると思わせる。しかし、全身の毛を剃るわけだから、そのようなことではないだろう。

この祭りは以前に死者も出たように命にも関わる危険な祭りであり、“毛が無い”ことは“怪我無い”ことに繋がるので、祭りの安全無事を祈願するものであろう。あるいは、“生まれたままの姿”に戻るにより、穢れの無い純粹無垢な状態となり、他人の厄を一手に背負うのであろう。

③3 日間の籠もり

順序的には逆だが、イエスが処刑されて3日後に復活したことの象徴。

④土餅搗神事並秘符認

土餅搗神事とは、旧正月 11 日早朝、あらゆる罪穢れを搗き込んだものと言われる土餅(去年の夜、儼追神事に於いて焼かれた礫(つぶて)の灰を餅に包み、外も真黒に灰をぬった餅、土餅(どべい)、灰餅、儼追餅とも言う)を宮司が搗

き、夜儼追神事に儼負人に背負わせ追放する御神事である。

土餅搗神事に引き続き、宮司が御神前に於いて“一宮・真清田神社、二宮・大縣（おおがた）神社、三宮・熱田神宮、総社・尾張大國霊神社”の四柱の神様の御神名を奉書に認め秘符を作り、御鉄鉾（おてっしょう、3メートル程の大櫛で、儼追神事で使われる神籬（ひもろぎ））に結び付けるのが秘符認である。

秘符に書かれた四柱の神様は、神の戦車メルカバーの象徴である。

⑤ 庁舎神事と大鏡餅

庁舎神事とは、旧暦正月 12 日に境内東南の庁舎に於いて“一宮・真清田神社、二宮・大縣神社、三宮・熱田神宮、総社・尾張大國霊神社”の四柱の神様を招聘し、天下泰平・悪疫退散・五穀豊穰を祈る神事で、儼追神事の前夜祭である。

鏡餅は本来、正月にお供えするものである。大鏡餅が奉納されるのは旧暦正月 12 日で、旧暦ではほぼ正月に相当する。鏡餅の 2 枚の餅はそれぞれが鏡で「合わせ鏡」を象徴しており、上に太陽の輝きを表す橙が乗せられる。これで「生命の樹」を象徴する。上に乗せる柑橘類は橙に限られる。その字の如く“木に登る”こと、すなわち「生命の樹」を上昇することを意味するからである。

本来、餅は種無しパンの日本版であり、ユダヤの過越祭が起源である。（種無しパンを意味するマツォが変化してマツオ、モチになったことは、＜日本の真相＞で述べた。）過越祭は春、ユダヤの正月に相当するが、これとの関連性については後述する。

⑥ 儼負笹の奉納

笹とは竹のことであり、竹の旧字は“艸”を「合わせ鏡」で逆にした字である。“艸”は左右それぞれ 3 本の木から成る「生命の樹」であり、両方で「合わせ鏡」による古事記と日本書紀の絶対三神を象徴している。

神社の御神事では忌竹が使われるが、意味はそれと同じである。“忌”とは“この上なく清浄”という意味であるが、イエスの死に関係しているので“忌”であり、イエスは蛇神なので“蛇＝巳の心”ということで“忌”であり、つまり忌竹とは、イエスが掛けられた聖十字架の象徴で「生命の樹」でもある。

“儼を負う笹”とは、まさしくイエスが掛けられた聖十字架に他ならない。

⑦⑧ 全裸の儼負人、裸男の白い下帯、儼負布

イエスは十字架に掛けられた時、衣服を剥ぎ取られた。それ故、儼負人は全裸となる。ユダヤとの関係でよく言われるのが、契約の箱アークが 20 年ぶりに戻った際、ダビデは裸になって踊ったから、これがはだか祭りの起源だ、という説がある。しかし、この話だと、儼負人が厄を一手に背負うという意味がまったく不明であり、はだか祭りではアークを象徴する御神輿が登場せず、矛盾する。

儼負布は剥ぎ取られた衣服を象徴している。剥ぎ取られた衣服はくじ引きでローマ兵に分けられたが、イエスが身に付けていた神聖な布であるため、それを象徴する儼負布をもらおうと御利益がある。

裸男については、本来、裸である必要は無い。御神事上、儼負人が全裸で厄

を背負い、儼負人に触れると厄が落ちるのであれば、儼負人だけが裸だと目立って人が殺到し、大変なことになる。そのため、御神事に参加する男たちは下帯だけを付けた裸になり、儼負人の影武者も登場する。下帯は、死装束の象徴である白である。

⑨儼負人はすべての厄を受ける

イエスは全人類の贖罪を背負って十字架に掛けられた。その象徴である。

⑩儼負人は最後に儼負殿に引き入れられる

儼負殿は御社の聖域であり、十字架に掛けられたイエスが死んで聖域＝天国に召されたことの象徴である。

⑪夜儼追神事

表向きの祭りが終了した翌日の午前 3 時に庁舎に於いて斎行される、はだか祭りの本義。儼負人に土餅を背負わせ、御神宝の大鳴鈴（おおなるすず）や桃と柳の小枝で作られた磔（つぶて）で追い立てて、境外へ追い出す。追い出された儼負人は、家路につく途中で土餅を捨てる。この土餅を神職の手により埋めることで、世に生じた罪穢悪鬼を土中に還し、国土の平穏を現出するのである。称徳天皇の御世より現代に至るまで最も神聖視され、重要視されている。

イエスは十字架刑と“復活”により人類の贖罪を清算したが、儼負人は多くの人の厄を受けたままである。その厄を落とすために、このような御神事が行われる。特に桃は、イザナギが冥界から戻ってくる際に投げてつけて悪霊を退散させたことから、厄除けや悪霊払いに使われる。

この時期に行われる節分は厄除けの行事であるが、日本に於ける節分行事の発祥は、秦氏の重要拠点である京都の吉田神社である。ここでは豆を蒔かず、疫鬼を追い払うために神職が桃弓で葦矢を放ち、桃が使われる。豆を蒔く風習は、室町以降に行われるようになったと言われている。

★はだか祭りの日取りについて（Wikipedia 参照。）

はだか祭りは旧暦正月の 13 日に行われ、イエスが十字架に掛けられる様子を再現したものである。イエスが処刑されたのは、ニサンの月 14 日（過越祭前日）と言われているが、これとどのような関係があるのだろうか。

過越祭とは、次のような祭りである。主がモーゼを指導者に任命して、エジプトに囚われているヘブライの民を約束の地へと向かわせようとするが、ファラオがこれを阻止しようとした。そこで主は、エジプトに対して 10 の災いを与えた。その 10 番目の災いが、人間から家畜に至るまで、エジプト中のすべての初子を殺すというものである。しかし、犠牲の小羊の血を家の入り口の 2 本の柱と鴨居に塗っておけば、その家は救われる、と主は約束された。その印が無いエジプト人の家にはすべて災いが降りかかったが、主の教えに従ったヘブライの民の家には災いは無かった。主の成された災いが過ぎ越した、ということに由来し、過越祭と言われるようになった。

過越祭は、現在もユダヤ暦ニサンの月に行われる。ユダヤ暦はユダヤ人の間で使われた暦で、太陰太陽暦である。ユダヤ暦には政暦と教暦の 2 つの暦がある。これは、バビロン捕囚前後で用いた暦が異なるためである。政暦とは、今日のユダヤ教で用いられている暦のことであり、教暦とは古代の農耕暦のことである。

ニサンの月は、現在の太陽暦では 3 月から 4 月の時期であり、東洋の陰暦（旧暦）では仲春（如月）または季春（弥生）である。政暦では秋から新年が始まるので 7 番目（閏年では 8 番目）になり、バビロン捕囚後はバビロニアの言葉ニサンヌに倣って、ニサンと呼ばれるようになった。バビロニア暦の新年は春分を基準として決まり、春分に最も近い朔日（新月の日）が元日である。

過越祭前日には前述のように家の入り口の 2 本の柱と鴨居に子羊の血を塗り、当日には酵母の入っていないパン（マッツァー）と苦菜を食べる。ユダヤ暦では日没で日付が変わるが、14 日の夕方から 21 日の夕方までの 7 日間は酵母入りのパンを食べてはならず、仕事もしてはいけないことになっている。

つまり、ニサンの月を旧暦の如月と見なし、それを現在の暦上での如月である 2 月に行っているのである。2 月は厄除けの節分行事の翌日に立春があり、旧暦の初春に相応しい。そして、鏡餅は「生命の樹」であり、酵母の入っていないパンが原型だから、正月にお供えする（大）鏡餅を奉納するのである。

日数的には旧暦の正月 13 日とイエスが十字架に掛けられた 14 日で合わないが、これは 12 人の使徒とイエスで合わせて 13 人、ということ象徴しているのである。

欧米では、イエスが磔にされることを再現する祝祭は無いが、代わりにイエスの復活を記念する復活祭が行われる。これは“イースター”として有名である。復活祭は春分の日の後の、最初の満月の次の日曜日に祝われ、2009 年の復活祭は西方教会では 4 月 12 日、東方教会では 4 月 19 日である。つまり、こちらはニサンの月を太陽暦で見ているのである。

なお、政暦では秋から新年が始まり、ニサンの月は 7 番目（閏年では 8 番目）に相当するが、ニサンの月が現在の西暦で 4 月がメインだとすると、逆算して、新年は 10 月になる。10 月は神宮で最も重要な御神事である神嘗祭が斎行されるが、神様のお正月とされている。つまり、神宮暦はユダヤ暦を基本としているのである。

★尾張一宮で開催されることについて

はだか祭りが開催される神社は尾張大國霊神社で、御祭神は尾張大國霊神である。尾張地方の総鎮守神、農商業守護神、厄除神として広く信仰されており、奈良時代、国衙（こくが）に隣接して御鎮座していたことから尾張国の総社と定められ、国司自らが祭祀を執り行った神社である。国衙を中心として営まれた都市域を国府と言い、それ故、通称“国府宮”として広く知られている。

尾張国は物部氏のトップである尾張氏に因み、その総本山は熱田神宮で、御祭神は熱田大神という聞き慣れない神様である。現在は相殿の神として天照大神、スサノオなどが祀られているが、本来は熱田大神である。ならば、尾張国のあらゆる神社は熱田神宮の別社であり、熱田大神＝尾張大國霊神である。

別宮には 5 個の大きな自然石が円形に立ち並ぶ磐境（いわくら）が本殿に接する形で存在する。尾張氏と同族の海部氏の籠神社には磐境があるから、この磐境の原型は籠神社である。また、秦氏縁の宗形（むなかた）神社があることから、秦氏の影響が伺える。

しかし、尾張国一之宮に相当する神社は真清田（ますみだ）神社であり、尾張大國霊神社ではない。真清田神社の祭神は天火明命（アメノホアカリノミコト）で、籠神社と同じであり、籠神社の別社であることが解る。籠神社の海部氏と熱田神宮の尾張氏は同族だから、熱田大神＝尾張大國霊神＝天火明命である。そして、表向きはこちらの方が格的にも規模的にも大きい、イエスを象徴する重要な御神事は尾張大國霊神社で行われる。

これは、本来の伊勢神宮が現在は小さな伊雑宮であり、イエスを象徴する御田植え祭が伊雑宮で行われるように、本来の尾張国一之宮は尾張大國霊神社であるが故、と考えられる。

天照大神の御神体＝聖十字架は、日本の地に於いて、最初に籠神社に到着した。そして、伊雑宮が最後で阿吽を成し、途中で立ち寄った地点が“一之宮”となっている。（近畿・東海以外の一之宮、一宮という名称は、これに倣ったものと考えられる。）尾張国は物部氏の最大拠点であり、そこへ秦氏最重要の御神体が到着し、尾張国一之宮となった。言わば、尾張国一之宮は物部氏と秦氏の融合を象徴する地点であるが故に、他の一之宮では見られない、天下の奇祭が斎行されるのである。そして、本来の神宮である伊雑宮が皇太神宮の別宮として封印されたが、御田植え祭として鍵となる象徴が残されたように、ここでも本来の尾張国一之宮である尾張大國霊神社が封印されて尾張国四宮となり、鍵となる御神事をはだか祭りとして継承しているのである。伊雑宮も尾張大國霊神社も物部氏の拠点だから、元はヤハウエを祀っていたのである。

なお、真清田神社の“真清田”は“真に清い田”であり、“田”の四角は○が元で“○に十”であり、“日の神が十字架に掛けられた”ことを暗示している。つまり、“真清田”という名称で“真に清い日の神が十字架に掛けられた”ことを象徴しており、尾張大國霊神社のはだか祭りと表裏一体を成していることが解る。

このように、国府宮のはだか祭りは、神道の謎を解くための重要な鍵が秘められたお祭りで、イエスが磔にされる場面を再現しているのである。

★★大縣神社との関係

何故か、尾張国二宮は大縣神社である。大縣神社は尾張開拓の祖神、大縣大神＝大荒田命（オオアラタノミコト、日本武尊の三世孫で迹波縣君の祖）を祀り、事業繁栄、開運厄除の守護神として仰がれている。しかし、(Wikipedia に

依ると)大縣大神は国狭槌尊とする説、天津彦根命(大縣主の祖神)とする説、少彦名命とする説、大荒田命とする説、武恵賀前命(神八井耳命の孫)とする説などがあり、はっきりしないのが実情である。国狭槌尊(日本書紀)であれば、古事記では高御産巢日神に相当するから、イエスを象徴していることになる。現在の神社はすべて天照大神＝イエスを分魂して祀っているから、これでも正しいのである。

大縣大神の荒魂は近くの本宮山に祀られており、別名は真霊山、真神山などである。本宮山には山姥物語という民話が伝承されているが、それは、大蛇の化身である山姥が、福富新造に矢を射られて鞍ヶ淵へ逃げたという伝承で、この付近一帯が鞍ヶ淵とされている。大蛇と言えば八岐大蛇が思い浮かぶが、八岐大蛇はスサノオに関係し、スサノオは天照大神の荒魂にも相当するので、辻褄が合っている。

しかし、大縣神社と言えば、これよりも姫之宮が有名である。姫之宮は御祭神の神裔である玉比売(タマヒメ)命を祀り、古来より安産・子授・縁結び・夫婦円満、特に女性の守護神として篤い信仰がある。姫之宮の祭りでは、女陰を象った神輿を中心とする神幸行列が行われていたが、戦後、風紀上の問題があるということで、現在はおかめの顔の御輿に変わっている。境内には、女陰を象った石の御神体がある。これを陰と見るならば、対する陽は小牧の田縣(たがた)神社である。

田縣神社の創建は古いらしいが、詳しくは不明である。御歳神はスサノオの孫、御歳神(ミトシノカミ)である。農業を司り、五穀豊穰、企業繁栄の守護神である。スサノオの原型はイナンナだから、豊饒の神となる。807年(大同2年)に編纂された「古語拾遺～御祭神の条～」の故事に基づいて、男茎形(おわせがた、男根)を奉納し祈願するようになった。

田縣神社の豊年祭が3月15日であるのに対し、大縣神社は3月15日以前の日曜日に豊年祭が斎行され、こちらも国府宮のはだか祭りに劣らず、奇祭度は抜群である。では、大縣神社と田縣神社の性器崇拝の奇祭が象徴していることは何なのか。イナンナが性に関係が深いことを暗示しているだけなのか。

単純に考えれば、物部氏＝十支族は偶像崇拝により亡国となったので、その名残の神事となる。しかし、それをわざわざ再現し、行ってはならない事だと戒めていないので、そのような意味ではない。

まず、主神が国狭槌尊とも見なせる大縣神社はイエスに相当し、スサノオと見なせる田縣神社はイナンナ＝マグダラのマリアに相当する。大縣は女陰、田縣は男根を祀っているので、性が「合わせ鏡」になっている。これは、伊勢の皇大神宮には聖十字架が祀られているが故に、カッパラー的に陰＝女神にせざるを得なかったのと同じである。大縣＝大像＝大象で、“大を象る”という意味だから、これは“十字架に掛けられた人＝イエスを象る”ということに他ならない。しかし、漢字のカッパラーでは田縣も“田＝○に十＝十字架に掛けられた日の神”を象るということになるから、つまりは大縣も田縣も同じとなる。それに、イエスは姦淫を戒めているので、性器を祀り上げることとイエスとは矛盾する。では、性器を祀り上げることと、大縣神社、田縣神社の真意は何な

のか。

性器崇拝の代表的な偶像崇拝はディオニソスであり、その根源はエジプトのイシス＝オシリスのカルトである。イシスの正しい名はアスタ、オシリスはアサルでマルドゥクの息子である。アサルはシャムガズと兄弟サツの策略により殺害されたが、聖堂の墓に埋葬される前に、アスタは彼のペニスから精子を抽出し、自分を妊娠させ、アサルの世継ぎホロン（ホルス）を産んだ。そして、シャムガズとサツの野望は、ホロンによって打ち砕かれた。（＜神々の真相 1＞より。）つまり、男根はオシリス（アサル）の、女陰はイシス（アスタ）の象徴であり（インダス文明ではリングとヨニの性器崇拝になっている）、大縣神社がイシスの、田縣神社がオシリスの神殿ということになる。両社では豊年祭の最後に餅撒きが行われるが、餅は米から作られる実りの象徴であり、米を臼（女陰の象徴）と杵（男根の象徴）で搗いて作るから、ホルスの象徴である。また、白い米粒はオシリスの精子を象徴する。

大縣神社と田縣神社がエジプトに由来する証拠は他にもある。この2つの神社とはだか祭りの尾張大國霊神社はほぼ直線上にある。尾張大國霊神社と田縣、大縣神社の間には岩倉＝磐があり、そして尾張大國霊神社の別宮にも磐があり、磐の原型はピラミッドである。そして、尾張大國霊神社のほぼ真東には春日井があり、“春日”の元は春日神社で、エジプトが元であることは＜神々の真相 2＞で述べた。春日井からやや東北に行くと高蔵寺（こうぞうじ）があり、“高蔵”は“高倉（たかくら）”とも読め、“高”“倉”はいずれも“死と復活の儀式”を行うことができるピラミッドの「重力拡散の部屋」を象徴することも＜神々の真相 2＞で述べた通りである。このように、大縣神社と田縣神社の周辺には、両神社がエジプトに由来することを象徴する物、地名が多く見られ、謎を解くための鍵として残されていることが解る。

これまでは女神と言うとイナンナだったが、ここでイシスが登場した。この両者の名前が混在していたのが、＜神々の真相 5＞で述べたセム族の女神が祀られていた最古の古代都市ビュブロスである。ビュブロスの王たちは、自分に祝福が与えられることを、そして末永くビュブロスの王であることを、女神に祈願し、その女神の名はマリ、アシュタルテ、アシュラ、アシュトレト（アシュタルテのヘブライ語）、イシュタル、アセト（イシス）、ヘト（ハトホル）などである。この中で、アセト（イシス）はアスタ、ヘト（ハトホル）はホルスの母＝イシス＝アスタであり、他はイナンナの別名、変形名である。つまり、イナンナとアスタ＝イシスが豊饒の女神ということで同一視されてしまっているのである。（原因はマルドゥクによる改竄である。マルドゥクによる改竄により、豊饒は男性と女性の結合によってもたらされるという性器崇拝カルト＝偶像崇拝へと発展した。）そうすると、大縣神社はイシス神殿であると同時に、イナンナ神殿でもある。イナンナであれば、性器崇拝と豊饒の象徴となるのも納得できる。大縣神社の主神は大縣大神であるが、本来の御神体である本宮山にはその荒魂であるスサノオが祀られているから、やはりイナンナの神殿となる。

尾張大國霊神社ははだか祭りによってイエスが十字架に掛けられる場面を再現するからイエスを象徴している。そして、大縣神社がイナンナを象徴しているならば、尾張大國霊神社はドゥムジの象徴となる。

さて、エジプトが登場したりイエスが登場したりして、これでは話が混乱してしまうので、元を辿ってみる。この近辺は物部氏のトップである尾張氏の領地である。そして、最重要拠点である熱田神宮（三宮）を除くと、真清田神社（一宮）、大縣神社（二宮）、尾張大國霊神社（四宮）の中で最も重要なのは尾張大國霊神社である。真清田神社は秦氏による神社改革によって尾張大國霊神社が封印されてから創建されたと考えられる。そうすると、元々あったのは尾張大國霊神社と、表向き由来が解りにくい田縣神社と大縣神社である。

物部氏は背教故に離散した十支族の末裔であり、秦氏が渡来するまでイエスのことは知らない。そして、神社の原型は狛犬と共にエジプトのピラミッド（神の宮）にあることは<神々の真相 2>で述べた通りである。ならば、ほぼ一直線上に並ぶ尾張大國霊神社、田縣神社、大縣神社もピラミッドを想定しており、エジプト神話の主神 3 人が祀られていたと考えられる。すなわち、次のような対応である。

・大縣神社：イシス、田縣神社：オシリス、尾張大國霊神社：ホルス。

尾張大國霊神社がホルスに相当する。通常のエジプト神話学では、ホルスは王権に関わっており、地上を統治するファラオはホルスの化身と見なされている。また、ホルスはオシリスの“死と復活”を象徴するとも見なされている。

（Wikipedia 参照。勘違いしてはならないが、エジプト神話の真相を当てはめているわけではない。）つまり、尾張大國霊神社は人間の王権に関わり、“死と復活”を象徴していた。このような性質を有する神あるいは人物は、イエスにおいて他にいない。だからこそ、秦氏による神社改革では、イエスが十字架に掛けられる場面を再現したはだか祭りが尾張大國霊神社で行われるようになったのである。このように、大縣神社、田縣神社、尾張大國霊神社でエジプトの神の宮を象徴しているのなら、熱田神宮は総本山としてヤハウエを祀っていたのである。

そして、漢字のカッパラーから解るように、秦氏によって神社が改革されてからは、はだか祭りでイエスが十字架に掛けられる場面を再現する尾張大國霊神社と同様に、ほぼ一直線上に並ぶ大縣神社も田縣神社も十字架に掛けられたイエスを象徴することになったのである。ただし、大元が何か解る手掛かりとして、性器の偶像を祀り上げるお祭りが残されたのである。

ここで、一宮～四宮の並びを見ると、一宮（真清田神社）と三宮（熱田神宮）を結ぶ直線と、二宮（大縣神社）と四宮（尾張大國霊神社）を結ぶ直線は十字＝十字架を形成する。二宮の本来の御神体である本宮山は尾張富士、白山と合わせて尾張三山と呼ばれているが、尾張富士と白山は本宮山を中心にほぼ対称の位置にある。

二宮と四宮を結ぶ直線上には入鹿池がある。入鹿池自体の歴史は江戸時代に始まり、比較的新しいが、入鹿村の歴史は古く、縄文時代後期のものと見られる入鹿池遺跡がある。安閑天皇 2 年（535 年）に入鹿屯倉（みやけ）が設置されたが、大化 2 年（646 年）に廃止となった。（Wikipedia 参照。）つまり、入鹿村自体の歴史は大化の改新以前にまで遡るから、蘇我入鹿に因んでいる可能性がある。

この直線を更に延長すると諏訪大社に行き着く。諏訪大社の御神体は守屋山であり、これはエルサレムのモリヤの丘に因む。また、諏訪大社と言えば御柱祭であり、1 つの社に於いて長さの異なる 4 本の御柱が建てられ、合計 4 つの社についてすべて建てられる。その元は、伊勢神宮外宮の地下殿にある天御量柱＝モーゼの旗竿を囲む 4 本の柱であり、メルカバーとテトラグラマトン YHWH を表す。外宮の元外宮は籠神社であり、尾張氏と同族の海部氏を取り仕切っており、尾張氏と関係が深い。また、このお祭りはエルサレムの神殿を建造する際にレバノンから木材を運んできたことの再現である。柱は古代イスラエルに於いて、異教の女神アシラの象徴であった。女神アシラはアッシリア由来のもので、＜神々の真相 4＞で述べたように、イナンナのことである。十支族は異教の神の偶像崇拜によって亡国となったから、十支族＝物部氏に関係が深い。それに、上社本宮の四脚門は禁足地の神聖な地であり、正面に磐座を拝する。エルサレムの神殿建造、磐遥拝はヘブライの民、特に十支族＝物部氏に関係が深く、これも磐を拝する尾張大國霊神社、籠神社と関係が深い。ならば、諏訪大社も尾張氏＝海部氏が直接関わる物部氏の重要な拠点と言える。諏訪大社の宮司は代々守谷氏が継承していると言われ、“守屋”という名前は物部守屋を連想させることから、物部系の神社である。

また、モリヤの丘はアブラハムが息子イサクを主の生贄として捧げようとした場所である。主はアブラハムの主を信じる行動を見て、イサクの生贄を止めさせ、代わりにアブラハムは角を藪に引っ掛けていた 1 頭の雄羊を捧げた。実は、それを再現する祭りが御頭祭（おんとうさい*）として伝えられている。御頭祭では 75 頭の鹿の生贄（はく製）を捧げるが、“75”という数字はエジプトにいたヨセフが父ヤコブと 75 人の親族を呼び寄せたことに因む。ヘブライ語で書かれた旧約では 70 人となっているが、古代ギリシャ語で書かれた「70 人訳聖書」、北イスラエル王国の子孫が使っていたモーゼ五書である「サマリア五書」、「死海文書」では 75 人となっている。北イスラエル王国こそ十支族の国であり、これからも、十支族に関わりの深い物部系の神社であると言える。

しかし、御頭祭は別の見方も可能である。イサクが主の御心によって“復活”した、という見方であり、イエスの予型とする見方である。そうすると、御頭祭はイエスの“復活”も象徴したお祭りであると言える。先ほどの御柱祭は柱を勇壮に運ぶ。秦氏が渡来する前の物部氏に於ける柱の意味は前述のようであるが、秦氏による神社改革の後には、イエスに関わる心御柱を遥々運んできたことも象徴しているわけである。また、諏訪大社近くの諏訪湖では、冬場に御神渡（おみわたり）という現象が見られる。それは、湖面が凍ることによって氷が盛り上がる現象であり、上社の男神が、女神がいる下社へ行く際に通った

跡と言われている。この謂れは、イエスが湖上を歩いたという奇蹟に因んでいるのである。

このように、尾張大國霊神社―田縣神社―大縣神社―諏訪大社というラインは物部氏の重要拠点であり、尾張大國霊神社―田縣神社―大縣神社のラインがピラミッド、諏訪大社がモリヤの丘を象徴している。実際に地図上で角度を調べてみると、尾張大國霊神社から真東のラインを基準とすると、尾張大國霊神社―田縣神社―大縣神社―諏訪大社のラインは約 30 度となり、ピラミッドのあるギザから真東のラインに対して、エルサレムがある方向の角度とほぼ一致する。

このような十支族＝物部系の重要拠点は、秦氏によって見事にイエスの象徴を重ねられたのである。

*御頭祭

現在の御頭祭は明治 4 年以降の、体裁が変えられたものである。それ以前の御頭祭を記したホームページがあったので、紹介する。

(<http://www22.ocn.ne.jp/~kuroneko/onto-sai.htm>)

江戸時代の民俗研究家、菅江真澄（伊勢神宮御師の家に生まれ、30 歳からフィールドワークを兼ねて東日本を歩いた人）は「信濃の旅 すわの海」の中で御頭祭を紹介している。（信州大学教育楽部教授滝沢貞夫氏監修の「菅江真澄の信濃の旅 信濃古典読み物叢書 6」、信教出版部発行からの引用。）

…前宮という所に、十間間口の直会殿（なおらいでん）がある。そこには鹿の頭が 75、真名板の上に並べられていた。その中に、耳の裂けた鹿がある。この鹿は神様が矛で獲ったものだという。

上下（かみしも）に居ずまいを正した男が 2 人、動物の肉をまな板にのせて持って登場する。その足どりやいでたちなど、古いしきたりがあるのだろう。弓と矢を持ち、鎧を着、剣は根曲といって、柄の下で曲がったものを差している。直会殿の南の隅には、白鷺、白兎、雉子、山鳥、鯉、鰻、鮒などの肉、三方に入っているのは米三十搯だ。また菱餅、えび、あらめを串に差したのも目につく。こうして、神に供える大きな魚、小さな魚、大きな獣、鳥の類などいろいろなものが奉られ、数多くの器に組み合わせて供えてあると言える。

一の神主は、事情があってこの祭りに姿を見せなかった。一の神主の山鳩色（黄緑色）の御装束は箱に入れられ、敷皮の上に据えられ、その前にも酒や肴の用意がしてある。次の席の長殿（おさどの）、更にその下の座には、大勢の神官が皆敷皮の上に並んで、この供え物を下ろして食べる。神官はお互いに銚子で御神酒をついで回っている。肴は何度も何度もお代わりをしていた。小さな折櫃に餅、かや、山芋などを入れて、それぞれの前に並べられている。その内、長殿が敷皮から立ち上がり、1 本の木の下へ行く。弓矢を持っているので、何かを射ようとするのかどうか、多くの人垣の中でまったく見えなかった。

やがて篠の束の縄をほどき、篠をばらばらにしてその上に敷き、花を供える。

長殿はそのままじっとしている。そのとき長さは5尺（約1.5m）余り、幅は5寸（約15cm）ほどで、先の尖った柱を押し立てる。これを御杖（おつえ）とも御贅柱（おにえばしら）とも言う。長殿は、座っている場所から下りて、柱をよく見て調べ、この木は節があって良くない、などと言って、受け入れようとしない。御神（おんこう・おこう）と言って、8歳ぐらいの子供が、紅の着物を着て、この御柱にその手を添えさせられ、柱ごと人々が力を合わせて、かの竹の筵の上に押し上げて置いた。

長殿からは、4人目の下位の神官であろうか、山吹色の袂の神官が木棉襦（ゆうだすき）を掛けて待つ。そこへ上下を着た男が、藤刀を小さな錦の袋から取り出し、抜き放って長殿に渡す。長殿がこの刀を受け取り、山吹色の衣を着た神官に渡す。その藤刀を柱の上に置く。また、長い縄を渡す。木棉襦をした例の神官が、刀を柱のてっぺんに当て、刻みつけ、さわらの枝、柳の枝、象（きさ）の小枝などを、例の縄で結いつける。さらに矢も1本結びつける。また、3つの枝も結ぶ、これにも矢を1本結びつける。そして、もう1本の柱も刀で同じように刻みつけ、2箇所を結ぶ。こうして左右2本の柱を飾り立て、縄が残ると、藤刀できっちり切り放す。また柏の枯葉に糝を盛って、折箸で縫い通し、2つとも糝でくっつけて柱に掛ける。そして4つもこの御柱に挿す。

その後、神官たちが家の中ほどに立ち、祝詞を読み上げる頃には、御神楽の声が聞こえ出す。そして、拍手を打つ音が3つ聞こえて後、神楽が止んだ。例の神の子供たちを、桑の木の皮をより合わせた縄で縛り上げる。その縄で縛る時、人々はただ「まず、まず」と声を掛ける。灯し火を灯す。再び祝詞を読み上げた後、大紋を着た男が、子供を追いかけて神前へ出てくる。一方、長殿は、藤蔓が茂っている木の下に行き、家を造った時、屋根に刺した小さな刃物を、8本投げられた。

いよいよ祭りは最高潮となる。諏訪の国の司から使者の乗った馬が登場する。その馬の頭めがけて人々は物を投げ掛ける。しかしこの馬は、とても速く走る。その馬を今度は子供たちが大勢で追いかける。その後ろから、御贅柱を肩にかついだ神官が、「御宝だ、御宝だ」と言いながら、長い鈴のようなものを5個、錦の袋に入れて、木の枝に掛け、そろりそろりと走り出し、神の前庭を大きく7回回って姿を消す。そして、長殿の前庭で、先に桑の木の皮で縛られていた子供たちが解き放され、祭りは終わった。

一の神主（御祝の司）はこの神様の子孫で、この国の司も同様であり、長殿も守屋の大殿の子孫であるという。

(9) 節分関連

節分は厄除けの行事であるが、前述のように、日本に於ける節分行事の発祥は京都の吉田神社である。ここでは豆を蒔かず、疫鬼を追い払うために神職が桃弓で葦矢を放つ。

桃はイザナギが黄泉の国から戻る際、黄泉の軍勢が追いかけてきたが、剣を振り回しながら、生えていた桃の木の実を投げつけて退散させた。つまり、桃は魔除けでの象徴である。

葦は3つの葉に分かれた「生命の樹」の象徴であり、“神々の国”であるエジ

プトやメソポタミアに生育し、日本神話に於ける日本は葦原中国である。弓矢は、軍神の大元であるニヌルタの星座、射手座に因む。

このような、他とは異なる節分神事を行う吉田神社であるが、何故か、秦氏の重要拠点である。秦氏が取り仕切る御神事に相撲があるが、これがヒントになる。

相撲を取り仕切るのは吉田司（よしだつかさ）家という家であり、ここが一手に取り仕切る。ならば、相撲を取り仕切ることと“吉田を司る”は関係がある。“吉田”を縦に積み重ねると、“土”“口”“田”の3つの部分に分かれ、“田”の縦棒3本で三神三界となり、「生命の樹」となる。すなわち、“吉田司”で“「生命の樹」を司る”となる。土俵は絶対神の目であり、まわしも絶対神の目であり、幕内から大関への段階は「生命の樹」の上昇を象徴している。また、“田＝〇に十＝日の神が十字架に掛けられた”ことを暗示している。故に、“吉田”神社は秦氏の重要拠点なのである。

同じような字で、節分に関係する“福”がある。つくりは“一”“口”“田”の縦の積み重ねと、“田”の縦棒3本で三神三界となり、「生命の樹」である。へんは“示”であり、全体で「生命の樹」を示す、ということで“福”という意味となる。“示”はT字十字架の上に罪状板があり、下の点は2つのケルビムで、契約の箱アークの間に安置されていることを暗示している。更に、“示”も“一”“T”“ハ”で縦3つの積み重ねと、下の部分に3本の縦線ということで三神三界となり、「生命の樹」となる。

“福”と“吉田”の違いは“一”と“土”である。カッパーラ的に“土＝土”であり、“土”は土から人類を創造したエンキの象徴である。“一”は最初でアルファであり、すべての始まりだから、天＝ニビルであり、あるいは、地球に降臨した最初の正式なアヌンナキということで、エンキを象徴している。人類の始まりは、蛇神エンキに因るものである。

参考著書：

- ・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。
- ・学研ムーブックス、久保有政著、「日本の中のユダヤ文化」

初版：2009年10月

改定：2012年7月

改定2版：2012年12月